（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏　名　髙柳　さつき

かつて日本中世の禅に関しては、道元らの純粋禅の成立ということが中心に見られてきた。それに対して、栄西・円爾ら密教と深い関係を持つ禅は、兼修禅と呼ばれて不純なものとされ、過渡的な形態で、純粋禅によって克服されたと考えられてきた。しかし、近年の研究においては、鎌倉時代には円爾の聖一派の兼修禅的な流れが主流を占め、単純に過渡的な形態として軽視できない重要な役割を果たしたことが知られるようになってきた。

本論文は、このような新しい研究動向を承けて、聖一派を中心にしながら鎌倉期の禅思想の展開を、未刊資料をも使いながら、詳細に検討している。本論文は時代区分に従って全三章からなる。第一章では第一期として、院政期から鎌倉時代初期の達磨宗や栄西らの活動を取り上げる。第二章では第二期として、聖一派の形成者である円爾を中心に、円爾の影響を受けた同時代の関連思想家を取り上げ、さらには従来栄西の著作と考えられてきた『真禅融心義』に検討を加えている。第三章では第三期として、円爾以後の聖一派の白雲慧暁・痴兀大慧・無住一円（道暁）の思想について論じている。

第一章では、従来戒律無視という点のみが注目されてきた達磨宗に関して、新出資料をも用いて、そのような単純化ができないことを明らかにし、また、栄西系の禅と密教との関連について、密教側に立つ道範の視点から両者の近似性を確認した。第二章では、円爾の思想を、「一心」の理解という観点から、達磨宗や栄西との異同を明らかにし、さらに良遍・頼瑜・道元らを取り上げて、「一心」の理解を中心に円爾との関係を論じている。第二章第三節では、禅密融合の代表的な文献『真禅融心義』を取り上げている。その内容を詳細に検討すると、真言宗の頼瑜の用いている概念を使っており、栄西の著作ということはありえないことが証明され、心地覚心の門流により、頼瑜の禅批判に対する反論として書かれたものではないかと推測された。第三章では、従来ほとんど解明されていなかった円爾の弟子たち、白雲・痴兀・無住らの思想の解明を目指している。彼らは対他的な活動を重視し、他宗との融合をめざし、それによって時代の状況に対応しようとしていたことが明らかにされた。以上のような個別的な検討を経て、結論においては、黒田俊雄によって提示された顕密体制論の再検討を行ない、このような兼修禅の動向はその枠の中に収まらないことを示している。

このように、本論文は近年着目されつつも、いまだ十分に解明されていない鎌倉期の兼修禅の思想について、新資料を用いて検討を加え、その時代的な展開を明らかにした点で、大きな成果を挙げ、学界に寄与するものである。個別的な資料の読解に関してもう少し深める必要のあるところもあり、また章のつながりが分かりにくいなどの問題点もあるが、このような成果にかんがみ、博士（文学）を授与するにふさわしいものと判断される。